

民族学とアートの融合

— パリの新しい博物館 ケ・ブランリー —

パリに新しい博物館
ケ・ブランリーが誕生した。
アートという視点からの
展示を実現させたという
この博物館をめぐる動きを追いながら、
パリの博物館事情を探ってみよう。

大森 康宏 (おおもり やすひろ)
本館民族文化研究部

二〇〇六年六月三日、パリに新しい博物館が誕生した。その名は「ケ・ブランリー博物館」といってもほとんどの方が聞いたことがないのではなからうか。
一九九五年フランス共和国の大統領選挙でジャック・シラクが当選すると、アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカに関する芸術性の高いものや新しい美術品を展示する博物館の構想を打ち上げた。美術というからには、ほとんどアートに関係するものを展示す

所蔵品から選別した三五〇〇点あまりが移されることになった。
これにともない、二〇〇四年暮れには、一部の展示をのぞき、両博物館とも展示場の大部分が縮小を余儀なくされた。それらの収蔵品は国の保管庫に収められ、新しい展示に向けて選別を待つこととなったのである。

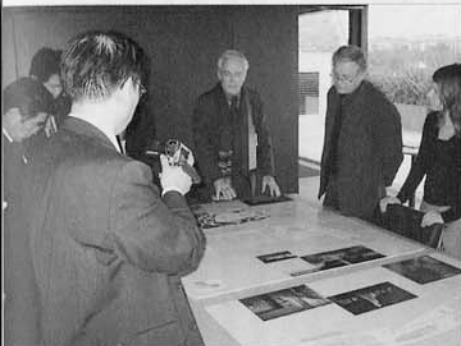
民族・民俗展示のあゆみ

パリには二年ほど前まで民族学に関してふたつの博物館と、民俗学に関するひとつの博物館が一般に公開されていた。

ひとつは、パリ東部のヴァンセンヌの森、動物園近くのポルト・ドレに一九三五年に「海外フランス博物館」として大きく建てられ、その後「アフリカ・オセアニア芸術博物館」となったものである。

初期の展示内容はフランス文学や美術における異国趣味、土着芸術、植民地領土についての博物館であった。当時のフランス植民地政策に役立ったとされている。

一九六〇年代に植民地の独立が世界的に進むとアンドレ・マルローによって博物館の名称と内容も変更された。アフリカ・オセアニアの芸術工芸品や民族美術とされる資料などを中心に展示した。収蔵品に関して「人類博物館」の協力を得て整理されるはずであったが、十分に



2005年10月、
展示場についての説明を聞く

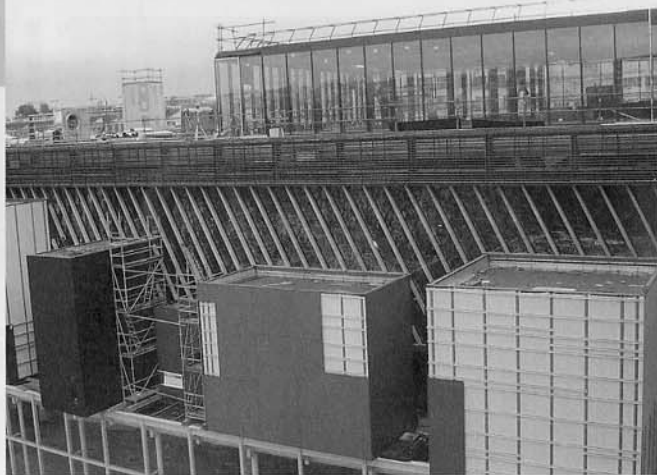


北西にある事務局の上から見たアメリカ展示場



植物につつまれた事務局の屋上

セーヌ河左岸の
ケ・ブランリー通りに面した建物の北側



ると考えられて構想が練られた。そしてこの新博物館に、トロカテロのシャイヨール宮にある「人類博物館」や、パリの東にある「アフリカ・オセアニア芸術博物館」などに収集されていた三〇万点以上の

実行されないまま新しい「ケ・ブランリー博物館」に入っています。

ふたつ目の博物館は、観光名所として知られるトロカテロの丘に立つシャイヨール宮のなかの「人類博物館」である。その歴史は、一六三五年に、セーヌ左岸のオステルリツク駅近くの植物園内に「自然史博物館」として建築され、医学の実験と教育の場としてスタートしたことに始まる。一七三〇年代からは医学に自然科学、化学、物理学などが加えられた。そして二〇世紀に入って、万国博覧会のために建設されたシャイヨール宮のなか、「旧民族誌博物館」の館長をしていた民族学者のポール・リウエが考古学、民族学の講座のために収集したものと「自然史博物館」の形質人類関連の収蔵品と一体化させ、一九三七年に「人類博物館」を構成した。

この「人類博物館」の展示は、形質人類学、考古学そして民族学という三つのコンセプトでできていた。しかし、それぞれの物質にあった保存と展示が一致していないなどの問題が残ってしまった。今回オープンした「ケ・ブランリー博物館」に統合されたのは、おもに民族学の資料である。ところが「人類博物館」には依然として、形質人類学の展示は居残って人類の発達史や人種学などの展示が続いている。何も展示されていないホール空間と人類誕生についてのわずかな展示は、来館者に統合の背後にある政治的

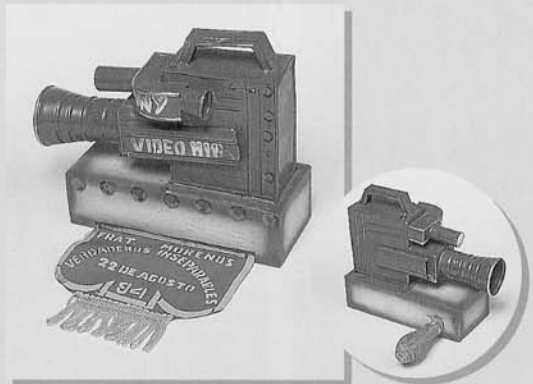
奇妙な楽器—マトラカ—

楽器(標本番号H196376、高さ/17.0cm 幅/20.0cm 奥行/16.0cm)

山本 紀夫 (やまもと のりお)

本館民族文化研究部

ラテンアメリカには奇妙な楽器が少なくない。ちよつと見たところ楽器とはとても思えないものも楽器として利用している。このマトラカもそんな楽器のひとつかもしれない。マトラカは、専門用語では擦奏楽器一般的には歯車のガラガラ(フチエット)として知られているものである。すなわち、歯車状に彫った木の軸を回転させ、それに薄い木片をひっかけてガラガラという音が出るようになっていた楽器である。しかし、これは、もともとはキリスト教の教会で使われていたものであり、しかも楽器としてではなく、教会の鐘のかわりの音を出す道具として使われていたらしい。キリスト教ではセマナ・サンタとよばれる聖週間の三日間は鐘が鳴らせないで、そのとき鐘のかわりにマトラカ



が使われていたのである。ところが、現在、ラテンアメリカではこのマトラカを楽器としてさかんに利用するところがある。なかでもボリビアのラパス地方ではマトラカの人気が大変なもので、黒人を模したモレーノという踊りにはマトラカが欠かせない。奇抜なマスクをつけ、派手なマントをまとった人物が数十人、ときには一〇〇人以上も多数の人がマトラカを「ガラツ、ガラツ」と鳴らしながら踊るのである。また、このラパスでは、マトラカの歯車部分を箱に入れ、その箱を共鳴体とするだけでなく、箱の上にはしばしば動物や植物、乗り物などをかたどったものを乗せる。写真はソニーのビデオカメラを飾りにしたマトラカ。

判された。リヴィエールのめざした民族の織り成すさまざまなモノ造りの展示とは、そのモノの有効性や活用目的に付加されている美的な形態を展示によって引き出すことであった。こうして新しい博物館の名称は建築現場の住所名「ケ・フランシー」ということに落ち着いた。しかしかつてのように民族的に比較できるモノの展示はなされないであろう。それは民族学自体が時代の流れに適さないことが指

な問題を感じさせるようだった。三つ目は、今回の「ケ・フランシー博物館」と直接関係ないものの、二一世紀に入つて急速に研究も展示も不活発になり、二〇〇一年に閉館されたパリ西部のブローニュの森に建つ「民衆芸術・伝統博物館」(A・P)である。同館は、いわばフランス民俗博物館とでもいうべきもので、長きに渡る設置要請のち一九七五年にやつと開館されたのだが、その後わずか五年あまりで閉館されたことになる。この博物館は一九三七年に先の「人類博物館」のなかで、当時革新的な博物館作りに貢献していた民族学者のジヨルジュ・アンリ・リヴィエールがフランス中心のコレクションを集めて展示することをポール・リウエから依頼されたことに始まる。彼は展示紹介と保存をする博物館学委員の仕事と、収集品に関する国立科学研究センター(CNRS)の民族学者の研究とを連結させることにした。研究者と学芸員との連携・共同作業は、現実にはそれぞれの思わくどおりに進まず、資料の活用をめざした整備もつまく実施できなかったといわれている。リヴィエールが退任した後は展示の改良も進まず来館者も減少した。この博物館の特徴であった展示品の背景となる環境も展示されており、フランスの伝統的生活様式がひと目で理解できるめづらしいものであった。しかしレヴィエール



オーストラリアの民族画で飾られた事務所の廊下

ほとんどの民族資料がもち出された「人類博物館」に残された形質人類学の展示

コースを中心とする民族学的芸術理論に基づく展示の難しさは、一般大衆には遠ざけられてしまったようだった。

美学の視点をとり入れた展示

ポール・リウエのもとで「人類博物館」の副館長をしていたジヨルジュ・アンリ・リヴィエールは、民族学と美学の視点から収蔵品を選択して展示することを念頭においていた。したがって「人類博物館」からフランスの民俗資料を独立させて展示することを考え、ついに「民衆芸術・伝統博物館」の展示構想において物質文化そのままの展示ではなく、美的な視点からの展示を実現した。彼の人間からしてもそれは明らかであった。彼の組織する調査隊には、ミッシェル・レリス、レオ・フロベニウス、ジヨルジュ・バタイユなどが関係していたのだ。

こうした歴史的影響を受けてか、新しい「ケ・フランシー博物館」では、構想段階より美的な視点からの展示をしかけていた。それはアール・ブルミエと称するいわゆる原初的あるいは初期の芸術というものに焦点を当てようとしたこととあらわれている。しかもこれを博物館の名称にしようとしたとの噂もある。これにはたちまち多くの批判が浴びせられ、数年にして取り下げられた。そこで人類芸術文明博物館などの名称も考えられたが、いずれも適当ではないと批

摘されているからである。いったい誰の基準で、調査、研究、展示の対象とすべきものを判断するのか、西洋からみた民族観でよいのか、といった疑問が投げかけられているのである。二年近くも開館が遅れた背景には、歴代大統領の一大企画の実現に際して、人事、経費、そして何よりも政治的な状況が次々と変化する、フランス文化の特色が見えている。